

Title	米田庄太郎著 経済心理の研究
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.10 (1920. 10) ,p.1499(161)- 1501(163)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201001-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は何を要求して居るか云ふ問題に就て、解釋を下して居る。本書の大部分は平凡の記述であつて單に米國勞働組合の狀況を紹介したに止まるが、第五編に至つては、讀者に多大の感興を與へなければ已まないであらう。日本の讀者に紹介したい箇所もあるが、現行法令に抵觸する恐れもあるので、之を敢てしない、研究者が原書に就て、一讀されることを希望する。

(堀江歸一)

Edward Friedmann, Der Mittelalterliche Welthandel von Florenz in Seine geographischen Ausdehnung. mit 2 Tafeln.

著者は主として Pegolotti の Pratica della mercantura を根本的史料として、中世に於けるフロレンス商業の地理的範圍を考察せしものにして、彼れは先づ結論に於てフロレンスの大銀

行家バルヂの代理者として千三百十五年より千三百三十六年の間にアントワープ、英國、サイプルス、小亞細亞の諸地に旅行せし Pegolotti の紀行と、十五世紀に於ける Giovanni di Antonio da Uzzano の旅行記とを比較して、十四、十五兩世紀の間にフロレンス其者の商業的發達上相違の存せることを明かにせり、即ち同市の販路は政治上の關係よりして漸次年代を經過すると共に亞細亞方面にて縮少せらるゝと共に自餘の方面に於て擴張せられし傾向を現せり、次に著者はフロレンスの對外的商業が果して何れの地點迄及びしやを考證して麻洛哥、支那、蘇格蘭、亞弗利加の内地方面等を指摘せり、斯くの如きは中世の企業が單なる Kundemproduktion の範圍を脱して近世的なる傾向を有せしことを明かにする有力なる證左となす、要するに本著は地理的意義を重要視せしに不拘、歴史的方面より

り見るも中世紀末に於けるフロレンスの企業を考察するものにとりて最も有力なる材料を提供するものにして、若、著者が更にフロレンス商業の地理的分布状態と共に更に當時に於ける之が商業の組織又は經營状態に就きて併せ記述せられれば、經濟學者殊に經濟史家にとりて更に大なる満足を求むるを得可し。(阿部秀助)

米田庄太郎著 「經濟心理の研究」

四六版六二六頁、定價金參圓八十錢、京都弘文堂發行

わが社會學界の寂寞を破る者は米田博士をおいて他に求めることは出来ない、本書は博士がすでに公にせる經濟心理に關する研究の諸論文の内一般的問題に關するものを蒐集したものである。即ち第一章「タールドの經濟心理學」第二章「經濟發達階段心理化の研究」第三章「原始經濟生活と交換有無問題」の三論文よりなる。

更に附録として「タールドとベルグソン」なる一文を附して居る。

以上の諸論文を通觀するも博士の研究は一に社會心理的基礎に立脚せるものである。例へば博士がタールドの説を批評せる言に「經濟學の出發點も到着點も人間であると云ふことは、茲に改めて述ぶる必要もないほど、今日の經濟學者の一般に承認して居る思想である。併し此思想の眞義は只之を簡人心理學的に考察する以上は未だ充分に理解し得られないものである。而してタールド先生の如く、之を社會心理學的に考察するに於て、始めて其の眞義が充分に又豊富に理解されるのである。」(本書一一六頁)とあるが如く、博士自身も亦かなり忠實なるタールドの學徒である。勿論本書に於いて博士自身の所論と見るべきものは極めて少ない。僅かに第二章第六節と第三章第三節の兩節のみであ

る。然しそれ等の所論に於いても博士が心理學殊に社會心理學を尊重せらるゝことは明かである。例へば其の社會の發展を論じて「要するに余は社會的感覚及び知力の發達は、社會進化及び文化發展の原動力にして、而して此原動力は無階級的社會に於ては一定の社會的團體、又階級的社會にありては一定の基本的階級を地盤として發達するものであると見るのである。」(三九五頁)となせるが如き、又博士の選良説の如き一見天才才能のやうな選良即ち個人を重んずるやうであるが、事實博士の説は社會に於ける一職分を果たすものとしてのみ是等選良が意義を有するのである。即ち「つまり社會進化及び文化發展は結局選良の力に因るものにして、選良は社會進化及び文化發展の能爲者であると思はるものである。」(四〇五頁)

博士自身其の序文に於いて述べられたるが如く、「我國の經濟學者及び社會學者の注意を惹くこと」を重なる眼目とせられたものである。蓋し斯界の泰斗たる博士が「余(博士)の結論よりは寧ろ其の問題の正當なる解決に達する爲めに吾人のとる可き研究の遂行、及び必要なる材料を指示」して後進に指導を與へんとしたものである。故に本書に記されたる博士の方法論を以つて直ちに其の全體と解するのは少しく不當であり禮を失するかも知れない。唯此の方面の研究も亦缺如せる我が學界に於いて此の書を得たのは少くとも其の點だけでも博士に對して感謝すべきであらうと考へる。

(野村兼太郎)

支配されて發動する、理性の、創始的作用の生産物と見んとするのである。」(四〇四頁)こゝに是以上詳論する必要もあるまい。社會進化及び文化發展の能爲者である選良も、博士が指導力と名付ける是等選良の發明發見の才能も與するに社會的感覚に支配されるものであるに過ぎない。指導力と云ふよりも寧ろ應化能力とも云ふべきものである。社會の進化、文化の發展をかく發生論的考察に依つてのみ、果して完全に考察し得られるであらうか。勿論本書は經濟心理の研究であるから此の點を力説するのは當然であるが、又吾人は社會學經濟學の出發點も到着點も人間であると思考するが故に、斯の如き議論のみを以つて其の全體を説明せんとするものに對して、多少の疑問を有せざるを得ないのである。

然し乍ら本書は博士の研究の全體ではない。